

説教

星の光よ、われらを導け

マタイによる福音書 第2章1～11節

権力と権威

「権力」と「権威」、この二つの言葉は似ていますが、その意味するところはまったく異なります。「権力」とは上から押し付ける力のことです。権力者は地位や政治力やときには武力や暴力を使って、ときには超法規的に、ときには合法的な仕方では他者を支配下に置こうとします。それに対して「権威」とは、下から認められる力のことです。その勇ましさゆえに、その優美さゆえに、その秀でた人格ゆえに人々から称賛され、何ら強制力を行っていないわけではないのに人々が慕って止まず、ときには人々がそのために命までも投げ出す覚悟を持つのが権威です。

クリスマス・ストーリーには「星」を欠かすことができません。しかし星に導かれて歩むのと、自分が星になろうというのでは大きな違いがあります。権力者は自分が星になろうとしますが、権威者には星の光がその上に止まり、止まった星はその権威者を文字通り「スター」として照らし出します。

伊藤 悟

大学宗教部長



権力者は自分の地位保全が最重要課題ですから、自分の地位が危うくなると、しばしば手段を問わずに自らの地位を確立させようとします。権力の亡者であったヘロデ王は、自分の国の内部で起こった出来事でありながらも、外国からの学者たちによって新しい王が生まれたと指摘されて異常なほどの恐怖を覚えました。しかも、すべてを掌握して支配下に置いておきたい彼にとって、自分の知らないことを外国の学者たちが知っていたことは脅威でした。

ヘロデの謀略

ヘロデはすぐさま、あらゆる手を使ってこの事実関係の調査を行うように命じます。国の有力者・専門家を次々と呼び集めて調べさせます。ユダヤの王になる者が本当に生まれたかどうか、もしそうだとしたら、その場所を特定せよ、と。場所さえ特定できれば、対応策を考えることができます。派遣する軍隊の規模も計算できます。集めら

れた祭司長や律法学者は預言者ミカの言葉をヘロデに告げました。「ベツレヘムから指導者が現れる」と。するとヘロデは外国からの学者たちをもう一度呼び寄せて、彼らが根拠にした星についてさらに詳しく問い詰め、生まれたばかりの王と星の因果関係を聞き出そうとします。

彼らは偉大な指導者が誕生するとき、新しい星が現れると信じていました。彼らは、星の異変に気づいたからこそユダヤの地までやってきたのです。それは地上にとつての異変、私たちの日常生活にとつての異変、そこからすべてが変わっていくという大きな出来事でした。彼らは星の兆候を見て、確かに「権威ある出来事」が起こったことに気づいたのでした。

権力者ヘロデは、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。私も行って拝もうとうそぶきます。拝むわけがないのです。ヘロデは拝むどころか、この新しい指導者の殺害を企てたいのです。ヘロデはすぐさまベツレヘ

ムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を一人残らず惨殺していきました。「新しい王」はエジプトに逃げて難を避けることができました。

権威ある嬰兒の誕生

こうした権力や暴力とは裏腹に、クリスマスにベツレヘムで生まれたのは、大いに権威あるお方でした。東方で見た星が占星術の学者たちを導き、この権威あるお方の上で止まりました。「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」と聖書は記しています。彼らは権力者ヘロデに出会っても、何の喜びも感じませんでした。しかし、生まれたばかりの嬰兒に出会ったとき、星の導きに確証を得、その権威の前に喜び溢れて、思わずにぎまぎ、幼子に贈り物を献上し、最初のクリスマス礼拝を捧げたのでした。

現代の私たちは、本当に大切な光に気が付いているでしょうか。あまりにたくさんの光、しかもイメージテートされたイルミネーションに振り回されて、その

美しさに翻弄され、何をイルミネートしているのかがわからなくなっているのではないのでしょうか。その昔も、空に一つしか星がなかったわけではありません。しかし学者たちは、あの星は違う、あの星は何かを暗示している、とあの時の星の光をしっかりと読み取ったのでした。

私たちはどうい星を見出すのでしょうか。どうい星を見つめ続けるのでしょうか。殺伐とした権力だけを追い求めるような今日、私たちは権威ある者を示す星をどこで見出すとよいのでしょうか。そこから何を読み取るのでしょうか。

イエス・キリストの誕生は、権力を求め、星になりたいと思っている者にとっては脅威です。しかし時代を見極め、謙虚にしかし積極的に世界の救い主を求める者にとっては、希望と喜びと解放を指し示すものです。誕生したこの嬰兒こそが驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君、真の権威者であると告知知らせるのがクリスマスです。

高等部より

クリスマス礼拝

12/19 金 高等部PS講堂
説教 陣内 大蔵(東美教会牧師)

クリスマス合同コンサート

12/20 土 高等部PS講堂
オルガン部、聖歌隊、ハンドベル部の演奏。

ホワイトキャンパ(高等部伝道キャンプ)

2015年1/4 日-6 火

(宗教主任 相良 昌彦)

女子短大より

クリスマス礼拝

12/10 水 13:10~14:30
カウチャー記念礼拝堂
説教 奥田 知志 (NPO法人 拾糧 (旧北九州ホームレス支援機構) 理事長)

聖歌隊、ハンドベル・クワイアクリスマス・チャリティー・チャペルコンサート

12/19 金 18:15~19:30
カウチャー記念礼拝堂
共演 東京21合唱団

(女子短大宗教活動センター)

Special Issue : Christmas, God invite me

大学より

田村 恵実
大学 教育人間科学部4年

私は、プレゼントをもらうだけではなく、すてきなプレゼントを贈ることのできる人になりたいと思っています。そう思えるようになったきっかけは、教育実習でした。

教育実習は困難の連続でしたが、そんな私を励ましてくれたのは、子どもたちでした。私は子どもたちから、まぶしい笑顔と優しくて元気の出る言葉、という贈り物を毎日得ることができました。「でも、贈り物をもらうばかりで、私に何かできることはないの?」そう感じてから、私は目に見えない贈り物をしたいと強く思うようになりました。何よりも子どもたち一人ひとりに愛情を注ごう、と心に留めて教育実習を行いました。私の教育実習は、目に見えないプレゼント交換の日々であったように思います。

私は大学で聖歌隊に所属しています。歌は目には見ませんが、聴く人の心に届きます。私たちは演奏会に来てくださった方を演奏会後お見送りします。その時、涙を流して「よかったよ!」と言ってくくださる方も大勢います。その方々を見ると、「私たちは、歌の贈り物をすることができた、お客さんからもいただくことができたのだ」と嬉しくなります。

クリスマスに、神様は私たちにイエス様という贈り物をしてくださいました。イエス様は今も生きておられ、聖書を通して私たちに語りかけてくださいます。神様の愛を受け、私は毎日希望を持って生きています。しかし様々な経験を通し、それだけで良いのかと考えるようになりました。愛するイエス様を送ってくださった神様に、私はどんなことができるのか、小さいことしかできないかもしれませんが、どんなに小さいプレゼントでも、神様は喜んでくださいます。

私は、クリスマスという神様からの大きな愛を多くの人に伝えたいと思います。私のできることから始め、祈りを通して神様と目に見えないプレゼント交換をしていきたいです。喜んで与え人になる。この思いを胸に、クリスマスを迎えたいです。

田中 ひかり
女子短期大学 子ども学科3年

クリスマスといえば、イルミネーションやクリスマスケーキなど、様々なものを思い浮かべることがができます。その中に、「記念日」や「プレゼント」を想像される方もいると思います。しかしクリスマスとは、イエス・キリストの誕生を記念する日であり、私にとっても、このクリスマスはとても大切な記念日であり誕生日なのです。

私の親はクリスチャンではありませんが、私は教会付属の幼稚園に入り、そこで神様と出会い、信じ、その道を歩むクリスチャンとなりました。その洗礼式を挙げたのがクリスマスだったのです。

私は、幼い頃から教会や聖書に親しみ、12月には降誕節の話や聞いたり、劇をしたり、家でおいしい料理を家族と囲んで、クリスマスプレゼントを楽しみにして、「クリスマス」を「楽しい日」として祝っていました。しかし成長して聖書を聞いていくうちに、クリスマスの本当の意味を考えるようになりました。そして、イエス・キリストが生まれたのは、ただ人に愛されるためではなく、天の神様が私たちに「救いの希望」という名の「クリスマスプレゼント」であるイエス・キリストを与えてくださったのだということ、聖書から教えられました。私は、このプレゼントを受けとり、クリスマスの日から新たに「クリスマス」として生まれ変わり、新しい人生を歩み始めました。

プレゼントをもらったり、何かのお祝いで「おめでとう」祝福されたりしたとき、どう答えますか?きっと誰もが「ありがとう」と言うでしょう。だからこそ私は、クリスマスになると、「メリー・クリスマス!!!」と言うだけでなく、神様がイエス・キリストという最高のプレゼントを与えてくださったこと、新しく生まれ変わらせてくださったことを思い出し、「クリスマスありがとう」という、この気持ちを大切にしています。

待ちに待ったクリスマスがやってきます。神様はこの日 イエス様をつかわして、私たちみなを導いてくださいます。クリスマスに寄せる思いを、各部のみなさんに語っていただきました。

三好 香彩
高等部3年

クリスマスの時期は誰もが自然と、たとえ理由が定かでないとも、心がはずんでしまう季節ではないでしょうか。クリスマスは全ての人に喜びを湧かせます。それはイエス様の降誕をお祝いしない人、できない人にとっても同じです。

親の仕事の都合で9月に住んでいた私は、インターナショナルスクールに通っており、仲の良い友達の中にイスラエル人の女の子がいました。そんな彼女がある年のアドベントの少し前、「私はツリーを飾ったりすることは出来ないけれど、代わりに香彩の家でこれをつけてみてほしい!」と言って、ガラスでできた天使のオーナメントをプレゼントしてくれたことがあります。きらきらしたものが大好きな、彼女らしいプレゼントでした。なぜ彼女がツリーを飾らないかと言うと、それは彼女の信仰がユダヤ教だからです。もとは同じ神様を信じる宗教ですが、ユダヤ教における救世主はイエス様ではありません。そのため、私達にとっての救世主であるイエス様のお生まれを祝うことはしないのです。しかし、確かに彼女はクリスマスを祝っていますが、この時期が近づいてくるにつれ、飾りや光で輝きはじめる街は大好きだと言っていました。クリスマスの嬉しい気持ちは、誰とも共有できるのです。

クリスチャン人口は世界の約30%、日本では1%未満だと言われていますが、クリスマスは毎年こなにも盛大に世界中で祝われ、12月の街は赤と緑と、たくさんの光であふれかえります。これはきっと、宗教が違って、無宗教であっても、この大きな日に皆何かしらの想いがあるからではないでしょうか。祝福する気持ち、喜び、歡い、人それぞれだと思えます。

イエス様は星の明るい夜にお生まれになり、その喜びは2000年経った現代の私達まで満たします。クリスマスを迎えるにあたり、多くの人感謝してられますように。そして降誕の喜びを、より多くの人と分け合えますように、様々な人にとって待ち遠しいクリスマス。今年もこの素晴らしい日が、どんな人にも素晴らしいものとなるようお祈りしています。

特集 神様に招かれるクリスマス

川島 祥子
幼稚園教諭

幼稚園では、子どもたちと保護者の方々、そして保育者、職員でともにクリスマス礼拝を守り、イエス様のご降誕を感謝し祝うときをもちます。礼

拝に至るまで、子どもたちはクリスマスストーリーを聞き、イエス様のお誕生の喜びを心に積み重ねて日々を過ごします。アドヴェント礼拝、献金、アドヴェントカレンダーの制作、家族へのプレゼント作り、学院でお世話になっている方々への感謝のプレゼント作り、そして、クリスマスの保育環境などを通して、クリスマスの喜びが深められるようになっていきます。

幼稚園に入園して初めてクリスマスの意味がわかったというご家庭もあります。クリスマスが単なるイベントではなく、心に、そしてこれからの人生に希望をもたらす出来事であることを、幼子の心にも感じて欲しいと思っています。幼児にとつて、希望とは変わらず共にいて下さるイエス様ご自身です。子どもたちはクリスマス礼拝のとき、ページェント、いわゆる降誕劇を通して、クリスマスの出来事を、賛美を交えて再現していきます。宿屋が一杯で馬小屋にしか泊められなかったヨセフとマリヤ、倒い葉桶に寝かされた赤ちゃんイエス様、救い主のお生まれであるにもかかわらず、なんというこの世の冷たさと罪深きなのでしょう。しかし、子どもたちが演じる降誕劇は穏やかな平和と喜びに満たされています。

子どもたちから引き出されたセリフの言葉、天使たちの賛美の様子、御子イエス様への礼拝をするための羊飼いたちの力強い足取り、はるばるイエス様を拝みにきた異邦人の学者たち、住民登壇が実施されることから始めてすべてが時になって起こった出来事であることなど、一つ一つに子どもたちのこころが込められていきます。献金を通して、与えることは犠牲が伴うことだと経験します。幼稚園で経験したクリスマスが、一貫教育の中で、子どもたちの心の中に希望の灯火となっていくように願っています。

いいづか ともひろ
初等部2年

ほくはきよ年のページェントで子どものやくになりました。子どものやくとは、お生まれになったイエスキさまにおくりものをとどける大切なやくなので、本番をととも楽しみにしていました。当日は、思っていたよりもたくさんの方がいたのできんちようしましたが、せいかたいのきれいな歌を聞くうちに、気もちがおちついてきました。イエスキさまに、「おたんじょうびおめでとうございます。」と心の中で思いながらわたすことができました。今年のクリスマスも、イエスキさまのおたん生をおいわいしたいと思っています。

北山 春菜
初等部3年

わたしは3年生の4月から聖歌隊に入っています。歌うのが大好きなので、とても楽しいです。しよと部にはたくさんのクラブがありますが、その中からなぜ聖歌隊を選んだのかというと、1年生の時に見た、クリスマスさんび礼はいの音学こうどうで歌うすがたにあこがれていたからです。くらいホールに聖歌隊の人たちが、ろうそくを持って左右から入場してきた時は、とてもふしぎでゆめのような感じがしました。礼はいの間も、ろうそくを持って歌うすがたがうつくしく、きれいな歌声とハーモニーがとてもすてきで、わたしはなんだかあたたい気持ちになったのをお話しています。今年のクリスマスさんび礼はいでは、わたしも聖歌隊として歌います。ろうそくを持って歌うのは少しきんちようしますが、上手に歌えるように一生けんめい練習します。そして、聖歌隊のみんなと心をひとつに、神さまのために歌いたいと思います。